

～甲斐のサムライ文化を辿る道～

秩父往還は、甲斐国と武蔵国、現在の山梨県と埼玉県秩父市を結ぶ歴史の道です。県境で雁坂峠を越えることから雁坂口・雁坂路とも呼ばれていました。その道筋は国道140号に重なる部分が多く、山梨県内では愛称「雁坂みち」が併記された国道標識を見つけることができます。

甲府市側の出発点、山崎三叉路から山梨市の小原西交差点までは、青梅街道との重複区間です。笛吹市までは山裾を緩やかに進む秩父往還ですが、山梨市に入ると笛吹川沿いに北上しつつ、奥秩父山塊に向かって標高を上げていきます。その最高地点である雁坂峠は、かつては「上下八里ノ間人戸ナシ、険隘ニシテ牛馬通ゼズ(上下八里に人家はない。道は険しく狭いため、牛馬は通行できない)」という難所としても知られました。

古くは日本武尊が酒折宮からこの道を辿り、秩父方面に東征したとの伝説が残されています。中世には沿線に、のろしによる通信のための烽火台が置かれるなど、軍事的役割が高まりました。近世以降には「ひと」や「もの」が行き交う道のほか、甲斐からは三峯神社や秩父観音霊場へ、秩父からは身延山・富士山・伊勢へと向かう信仰の道にもなりました。平地と山岳をつなぎ、様々な時代の足跡が刻まれた秩父往還の周辺には、奥深い自然と歴史が息づいています。

秩父往還から読み解く甲斐のサムライ文化

豊かな地景に抱かれた煙霞の道

秩父往還の沿線にはダイナミックな地形や水景、眺望を楽しめるスポットが点在しています。これらのスポットの自然美は素のままの魅力だけでなく、時には修験の行場・道場という形で、往時の荘厳な雰囲気や今に伝えています。

甲州市内の藤木・小屋敷・上井尻地区に張り巡らされた水路「セギ」は、深い谷を刻む笛吹川から水を導いた知恵の結晶です。セギは塩山地区の生業や集落景観の骨格となり、その水は恵林寺、向嶽寺などの寺院庭園にも用いられました。

甲斐源氏・武田氏を育んだサムライ文化の道

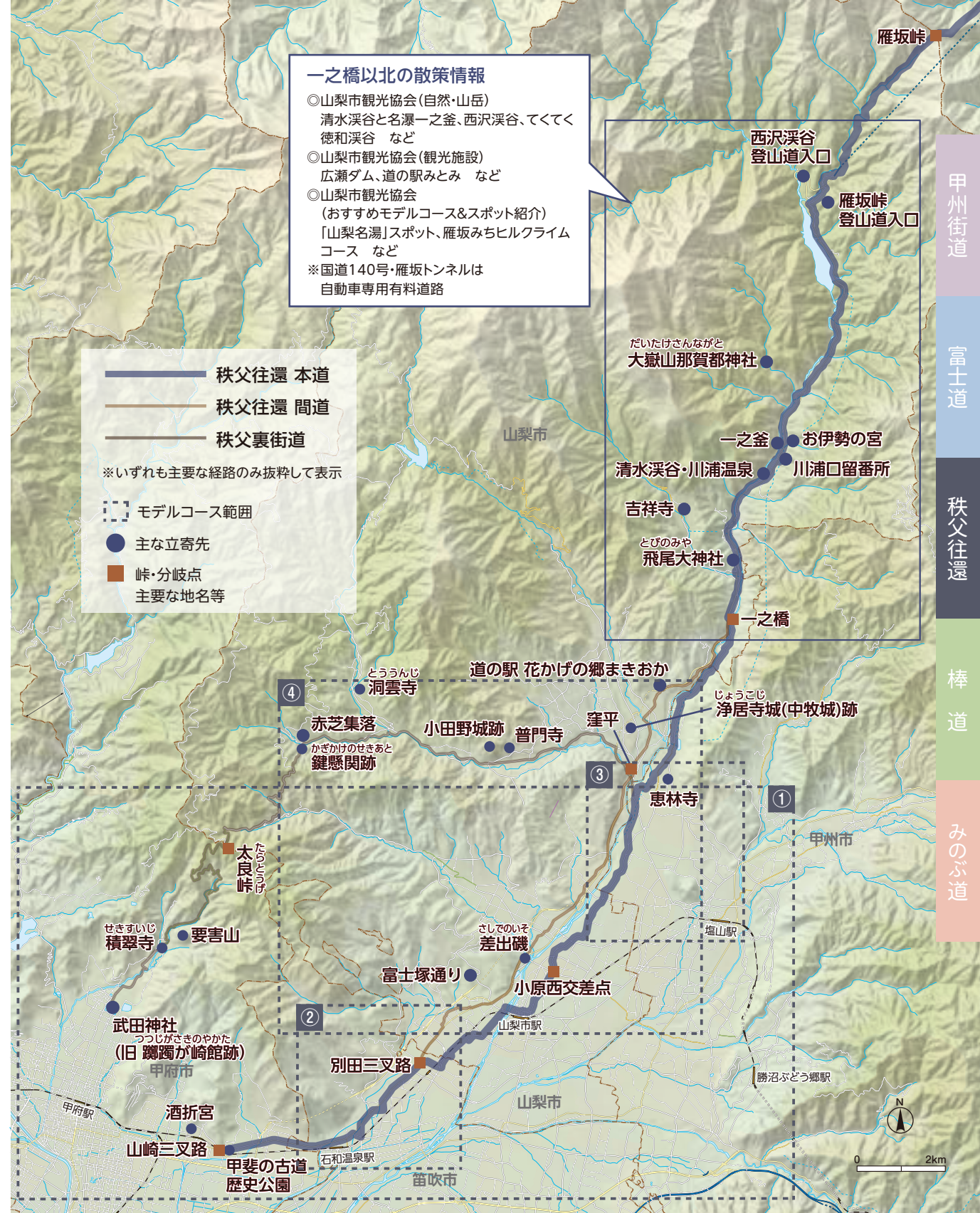
中世、源平合戦の時代から戦国時代まで、甲斐源氏のひとり安田義定や、信時流武田氏の一族など、数多のサムライたちが秩父往還の周辺にその足跡を残しています。

彼らはそれぞれの時代に覇を唱えた武の体現者でしたが、同時に当時最新の知識を持っていた禅僧や、その活動基盤であった寺社の強力な庇護者であり、彼らのもたらす文化に通じた教養人でもありました。

遺されたものを次代へ紡いだ歴史の道

甲斐源氏と武田氏が遺した足跡と文化は、近世以降、次代の権力者によって、あるいは武田氏の末裔によって継承され、この地の歴史となっています。

太平の世が訪れ、民が行き交い暮らす道となった秩父往還には番所が設けられ、道標や道祖神、馬頭観音が置かれました。沿線には枯露柿を干す軒や養蚕のための家屋など、様々な生活の景が造られました。



次の頁のマップでは秩父往還の全体像と、次頁から紹介するモデルコースの位置を紹介します。あわせて、この道のテーマに深く関わる自然・歴史資源や、景色・眺望を楽しめるスポットを中心に、一部を抜粋して掲載しました。秩父往還にはメインルートである本道の途中に、バリエーションルートである間道があります。本道が笛吹川の左岸を進むのに対して、間道は別田三叉路で本道から分岐して笛吹川の右岸を進み、一之橋の上流、山梨市三富上柚木で合流します。このマップでは代表的な道筋を記載していますが、実際には本道・間道のどちらも、細かな分岐と合流を繰り返していました。

また、甲府市の武田神社(旧 躰躰が崎館)から太良峠、古峠を越え、赤芝集落を経て秩父往還に至るルートは、秩父裏街道(秩父口横往還、西保海道)と呼ばれました。本書ではモデルルートとしての御紹介ができませんが、一之橋以北にも雄大な滝の間近に迫る一之釜、山深く分け入る大嶽山那賀都神社、武田伝令隊ゆかりの彫刻が残る吉祥寺など、魅力的な資源が多くあります。マイカー、またはレンタカーで、是非こちらにも足を伸ばしてみてください。